



八景中学校だより
2022. 1. 17
第13号(文責:細見)
三田市立八景中学校

1995年1月17日 午前5時46分。

阪神淡路大震災が発生し、私たちの大切なものを数多く奪っていきました。あの震災から27年を迎えた今日、八景中学校では、『防災の集い』として防災学習と避難訓練に続き、1.17追悼式を実施します。震災で亡くなられた方々を追悼するとともに、震災について学び、震災について考え、震災で培われた「きずな・支えあう心」「やさしさ・思いやり」の大切さを語り継いでいくための一日としています。

阪神淡路大震災は、生徒のみんなが生まれる前に発生しているので、詳しいことは知らないでしょう。そんなみなさんに、ぜひとも伝えておきたいことがあります。避難所になった中学校の様子です。1年前にもお知らせしたのですが、じっくりと読んでください。

避難所の中学生

震災が起こってしばらくすると、全国各地から被災地に多くのボランティアが入りました。(のちに「ボランティア元年」と呼ばれるようになりました。)微力ながら誰かの役に立ちたいという思いから、私も避難所になっていた神戸のある中学校へ、何度か支援に行きました。初めて行ったのは2月下旬。地震や火災が発生してから1か月余りが過ぎた頃、避難所になっているその中学校で生活されていた被災者が2,000人以上だったように記憶しています。グラウンドには自衛隊の大型テントが張られ、体育館は避難者の毛布と段ボールで埋め尽くされていました。当然、その学校のすべての教室に被災者がおられました。授業ができる教室は校舎の中にはなく、急ぎよ建てた仮設のプレハブのみ。授業を再開できたのは2月になってから。しかも、1週間のうち2日あるかどうか。さらに1日6時間ではなく、せいぜい3時間ほどだとうかがいました。家が全壊して、一家で学校に避難している生徒が何人もいました。1月中は連絡がつかず安否の分からなかった生徒もいたそうです。その中学校に在籍する生徒2人が亡くなったと聞きました。

そんな状況でも登校できる生徒たちは、朝から毎日登校しているということでした。授業がないのに、生徒たちは何をしていたと思いますか？ あなたなら何をしますか？ 何をしようという気になれますか？

中学生たちは、誰に言われるでもなく自分たちで考えて、避難している人たちに声をかけていました。特にお年寄りや小さな子どもたちに、温かい声を。また、避難所と化した学校の掃除を隅々までやっていました。最も念入りに行っていたのが、避難者が使うトイレです。



1.17希望の灯り
(神戸東遊園地内)

『希望の灯り』の碑文

一九九五年一月十七日午前五時四十六分
阪神淡路大震災
震災が奪ったもの
命 仕事 団欒(だんらん) 街並み 思い出
： たった一秒先が予知出来ない人間の限界：
震災が残してくれたもの
やさしさ 思いやり 絆 仲間
この灯りは
奪われた
すべてのいのちと
生き残った
わたしたちの思いを
むすびつなぐ

その学校の先生からこんな話をうかがいました。

「水道が復旧するまでのトイレは大変でした。便を流せないで、たまる一方でした。それを見た生徒たちは、それをすくって片づけ、トイレをきれいにしたのです。そして、避難者のみなさんに協力を呼びかけたのです。自暴自棄になっていた被災者の心を動かしたのは、うちの生徒たちです」と。

少しでも支援ができたらと思って行ったボランティアでしたが、自分にできることを探し無心で尽くしている中学生たちから、『元気』と『勇気』と『やさしさ』をもらって帰ったことを覚えています。

一昨年の夏から、八景中の校庭に彩りを加えてくれている『はるかひまわり』。生徒会が世話をして咲かせてくれた『はるかひまわり』は、さかのぼっていくとこの阪神淡路大震災にたどり着きます。



家の下敷きになった小学6年のはるかちゃんがかれきの中から発見されたのは、地震発生から7時間後でした。震災から半年後、はるかちゃんの家があった空き地、はるかちゃんの遺体を発見した場所には、誰が育てたわけでもないのにたくさんのはるかひまわりが咲きました。はるかちゃんのお母さんはそれを見て、「娘がひまわりになって帰ってきた」と涙しました。近所の人たちは、この花を『はるかひまわり』と呼びました。はるかちゃんのクラスメイトが、『はるかひまわり』をもっともっと広めたいと思い、採取した種をまいて育てました。その種をほしいという人にゆずりながら、今日まで絶やすことなくつないできたのです。

その『はるかひまわり』が八景中にやってきて2年。次の夏も、その次の夏も、『はるかひまわり』を咲かせながら、「つながる心・支えあう心」「やさしさ・思いやり」を私たちも未来につないでいきましょう。

給食週間に思う

毎年1月24日は学校給食の日です。24日から30日までの1週間は全国学校給食週間になっています。この期間、清水山給食センターでは「ぼたん汁」や「黒豆ごはん」「三田のめぐみ井」といった地元感たっぷりの献立を提供してもらえます。献立はさておき、毎年この時期になると思い出すことがあります。今から34年前のことです。震災のこと以上に昔の話ですが、知っておいてほしいのです。

三田市から、「小学校の給食は続けるが中学校の給食は廃止する」という考えが発表されました。それを聞いた保護者や先生たちが、『同じものを食べさせたい』『温かくておいしい昼食をバランスよく食べさせたい』という願いを市に届けるために、PTAと小・中学校すべての教師がいろいろな団体と協力し、手分けしながら三田市民の署名を集めました。中学校の給食をなくさないでほしいという活動です。学校が終わった夕方から夜にかけて、中学生がいない家にもお願いにいきました。当時、三田市に住む有権者（20才以上）の数が3万人ぐらいだったと思います。そのうちの1万6千人以上の署名を集めたことを覚えています。その結果、中学校の給食を存続させるという願いがかなったのです。

いま、みんなが当たり前のように食べている給食には、時代を越えて多くの人たちの思いが込められています。食材を生産している人や調理してくれている人だけではなく、三田の給食開始（昭和32年・1957年）のために力を尽くしてくれた人や給食を守ってくれた人への感謝を忘れず、ありがたく「命」をいただきたいものです。健やかに、そして末永く生きるために。